

多国籍子育て家庭支援に対する保育者養成の課題  
—媒介語の英語に着目して—

前 川 洋 子

Issues on Training the Childcare Workers who Cope with the  
Problems of the Families Related to the Ethnic Backgrounds:  
Focusing on the English of a mediator

Youko Maekawa

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別冊

平成 31 年 3 月 31 日 発行

# 多国籍子育て家庭支援に対する保育者養成の課題

## —媒介語の英語に着目して—

Issues on Training the Childcare Workers who Cope with the Problems of the Families Related to the Ethnic Backgrounds: Focusing on the English of a mediator

前川 洋子

Youko Maekawa

### はじめに

平成 29 年改訂幼稚園教育要領第 1 章総則第 5 項「特別な配慮を必要とする幼児の指導」の特別支援の中には、障害をもつ子どもだけでなく、違う文化や言語をもつ多様な子どもたちが一緒に遊んだり生活したりすることは、どの子にとってもとても意味のあることである、と日本語でのコミュニケーションが困難な子どもに配慮していく項目が新設され、「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児の幼稚園生活への適応」が加えられた。このように外国につながる親子の急増は日本の社会問題になっている。

### 問題と目的

近年、都内においても増加している外国につながる人々、その中でも子育て家庭への支援について問題が山積しており、保育の現場は困難と混乱の状態にある。彼らを支援する保育者の多くは養成校において一般的な英語教育を受けてきたものの、筆者が関わる養成校の学生で保育の現場で使える実践力を備えた者の数は、そう多くは見受けられない。養成校で学ぶ学生たちの多くは、英語は話せたら便利だと考えている一方で、これまでの英語学習の経験から苦手・自分には習得不可能なものと感じてしまっており、英語を学ぶことの必要性を理解していないようだ。英語コミュニケーション科目を担当する教員の嘆きを幾度と耳にしてきた。養成校では、内容的には保育を扱っているものの、保育現場のニーズと養成校の英語教育の位置づけに格差が見られるようである。つまり保育者養成校の英語教育は、養成校や教員によって指導内容に差異があり、結果、学生が現場で使える実践的な英語

を習得しきれていないのが現状ではないかと想像し得る。

この研究の中心となる外国籍の(外国につながる)人々とは実にさまざまな国や地域から日本にて生活をしている人々のことを指すが、日本在住の多くの外国につながる親子は英語を第二外国語として活用可能である人々が多いが故に、英語は共通言語としての機能を果たすことに着目した。保育現場の課題とそれに対する方策は養成校における英語教科カリキュラムの見直し、検討の必要性を同時に帯びており、保育者養成校の役割は重要となる。

咲間は、「日本が質の高い文化や技術力を持ちながらも市場がガラパゴス化し国際競争力が低い分野をもつ点、2010年における TOEFL スコアがアジア 30 か国中 27 位と低迷する点等は、多文化保育・教育環境で育ち国際社会におけるダイバーシティに対応できる人材を養成していくことで大きく改善する可能性がある。1)と述べている。保育者・教育者養成校への期待と懸念は筆者も同様である。

本研究は保育現場の課題は何か、保育者が必要としている現場に沿った英語とは何か、現状を見る。そして今、まさに一人ひとりの保育者・教育者が多文化保育・教育に関する専門性と英語力を上げた実践力の双方を持つ保育者を養成するために、養成校における英語において何が必要なのか、どのようなカリキュラムが必要なのか、を検討することを目的とする。

多国籍子育て家庭支援に対応できる保育者養成また、本論の中では国籍・家族構成・年齢・在日期間をふまえ、外国籍の子どものことを「外国につながる子どもたち」と表記する。

## 方法

**対象** 都内及び4県の現役幼稚園教諭・保育者 143名

**質問紙配布** 143

**質問紙回収** 143

**回収率 100%** 有効回答 135 (有効回答率 94.4%)

うち 幼稚園教諭、元保育士 8名は調査時点で回答がなかったため、幼稚園教諭・保育士を除く 135名の回答を有効とした。

**方法** 2017年8月と2018年5月

質問紙調査「多国籍親子の対応で困った経験のエピソード」自由記述を行う。

2017年8月と2018年5月調査対象者は同一ではない。

自由記述の内容はテキストファイル化し、計量テキスト分析(テキストマイニング)をした。

分析には計量 KH Coder (樋口、2015)を使用した。

自由記述の似た文章はまとめた。例えば「日本語が通じない」「日本語ができない」「日本語がわからない」は「日本語」にまとめた。「園からの手紙」「園からのおたより」「お知らせ」は「手紙」にまとめた。

テキストファイル化した同データから保育者と外国につながる子どもたちの保護者の間にあるトラブルを拾い上げ、KJ法を用いて分析した。

**倫理的配慮** 質問紙調査の自由記述を行った幼稚園教諭・保育士に本研究の意図、学会や論文等において発表すること、の理解を得た上で、個人情報に配慮し、匿名の上でデータを活用する了承を得て調査を行った。

## 結果

### 保護者の出身国

自由記述の中から出てきた対応に困った保護者の出身母国の組み合わせは以下のとおりである。

行ごとの父親と母親は夫婦関係を表す。(表1)

アフガニスタン・アルゼンチン・イスラム 共和国・インド・エジプト・オーストラリア・ガーナ・韓国・カンボジア・シンガポール・スペイン・スリランカ・チェチェン共和国・チリ・デンマーク・トルコ・ネパール・パキスタン・バングラデシュ・フィリピン・フランス・ペルー・マレーシア・ロシア、22ヶ国。多国籍である。

表1 父親・母親の母国

父親の母国	母親の母国
バングラデシュ	バングラデシュ
マレーシア	マレーシア
チリ	アルゼンチン
パキスタン	日本
日本	韓国
日本	ペルー
バングラデシュ	バングラデシュ
カンボジア	カンボジア
日本	オーストラリア
ガーナ	ガーナ
インド	インド

日本	シンガポール
日本	スリランカ
アフガニスタン	アフガニスタン
ネパール	ネパール
イスラム	イスラム
デンマーク	日本
エジプト	エジプト
日本	フランス
ロシア	ロシア
バングラデシュ	日本
トルコ	フィリピン
スペイン	スペイン
チェチェン共和国	日本

さらにテキストファイルした結果、「親子の対応で困った経験のエピソード」と質問しているのに対し、全回答から親対応の困難エピソードが抽出された。子どもに関しては「文化の違いから保育者が初めての経験で戸惑った」といったエピソードは見られたが、困難感までには繋がらない記述がほとんどであったため、保育の中で困ったというよりも親への対応に苦慮している姿が浮き彫りとなった。

また自由記述より両親共に外国籍の場合、園の送り迎えや子育てが母親中心になりやすい。父親が日本人で、母親が外国籍の場合は両親共に外国籍の家庭に比べて、日本人の父親が主に園と関わることが多いことがわかった。両親ともに母国語もしくは英語しか使えない場合は園との対応に苦慮している傾向にある。一方、外国籍でありながらも両親のどちらかが日本語が使えると、保育者は日本語が通じる保護者の方に連絡をとり、仲介役を担う場合が多い。外国籍の両親であったとしても多くは、どちらかが日本語がわかる、もしくは日常会話程度はコミュニケーション可能であるケースが多くみられた。

また、保育者の勤務先、幼稚園・保育園・認定こども園、保育所ごとに国籍の偏りはなく、どの保育所にも様々な外国につながる親子が通園していた。

以下、保育者 135 名が記述した多国籍親子の対応で困ったエピソードの中で、多くあげられていた内容を国別に分けたものの一部をまとめた。(表 2)

表2 主な国別エピソード

フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語がわからないため日本人宛の連絡帳プラスメモを用意しなければならない ・二度手間</li> <li>・お弁当に白米と揚げ物のみ ・子どもが食べられず泣いている</li> <li>・親に伝えるが真意が伝わらない</li> <li>・英語の方が伝わりやすい ・保育者が英語が不得意のため通じない</li> </ul>
インド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴムを食べてしまい、それを伝えるのがジェスチャーしかできなかった</li> <li>・宗教上の理由で食べられないものが給食に入っていることを伝えるなど説明が大変だった</li> <li>・一時保育申請手続きの仕方が伝わらない</li> <li>・お弁当の説明が難しく絵を描いて説明した</li> </ul>
中国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けんかなどトラブルの時に親に説明することができない</li> <li>・旧正月など母国の暦行事にあわせて帰国 長期休みになってしまう</li> <li>・帰ってきた時園生活慣れるのに時間がかかる</li> <li>・遠足の時、担任が1対1でつかなければならない為他の子に目が届かない</li> <li>・祖母が教室内に勝手に入ってきたり、備品を動かしてしまったり、注意しても聞かない 勝手なことをされて困った</li> <li>・遠足時の集合時間に遅れて来て全体が困った</li> </ul>
モンゴル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片言の日本語で慣れるのに時間がかかった</li> <li>・アクセサリーを外してほしいと頼んだが無視された</li> </ul>
タイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・持ち物に記名することを理解してもらえない</li> </ul>
パキスタン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イスラム教の戒律を厳守するあまり園生活に馴染めない</li> <li>・日常生活は英語を混ぜて使っているため、英語でなんとか翻訳した</li> </ul>
韓国	<ul style="list-style-type: none"> <li>・送り迎えの祖母が話すのは中国語 母は韓国語 伝えるのが難しかった</li> <li>・運動会など大きな行事の前に長期間帰国する 本場直前にお休みされた</li> <li>・子ども同士のトラブルになったことを説明するのが難しい また理解されず園側にクレームが来る</li> </ul>
台湾	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片言で話すため相互理解にまで時間がかかる</li> <li>・園生活の行事や持ちものについてなかなか伝わらない</li> <li>・ただいま日本語習得中で日本語と英語以外の語が混ざる</li> </ul>
ドイツ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語がわからず、無表情 園の子どもの様子を伝えたいが日本人の父親にしか伝わらない</li> </ul>
コロンビア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園日よりなど理解されていなかった ・保育料給食費の滞納が続いた</li> </ul>

	・時間にルーズだった ・日本語がわかる父親頼みだった
スリランカ	・お弁当にタイ米のパスパピラフで子どもが食べにくく援助に手がかかった た ・大切な内容の手紙が読めず翻訳して伝えるのに時間がかかるし伝わりにくい
フランス	・親ではなく家政婦さんが送り迎えに来て親に直接話したいこともあった ・英語しか話せない方だったので英語が苦手な私は伝えられなかった

### 記述統計分析

総抽出語数は 752 使用された語数 407、異なり語数は 267 使用された語数 204 である。(表 3)  
文 76 段落 76 から抽出されたものであることを示す。(表 4)

表 3 総抽出語数と異なり語数

総抽出語数	(使用)	752	(407)
異なり語数	(使用)	267	(204)

表 4 抽出文と段落

集計単位	ケース数
文	76
段落	76

出現回数分布をみると異なり語数(n)=204 出現回数平均 2.00 出現回数標準偏差 3.44 (表 5)

表 5 出現回数平均と出現回数標準偏差

出現回数平均	2.00
出現回数標準偏差	3.44

これらのことから同じ語句が何度も重なって現れるのではなく様々な言葉が出現している。

### 抽出語品詞分析

自由記述をテキスト化 KH コーダーで分析した結果、抽出された名詞の多い順である。(表 6)  
名詞抽出の中では日本語と英語が多く、動詞と併せると、動詞では、食べる、持つ、通じる、話せる、謝る、頼る、違う、間違う、教える、敬う、見せる、困る、使う、受ける、伝わる、伝える、読めるなど言語コミュニケーションに関する動詞が多く抽出された。

表 6 抽出名詞

日本語	13	お菓子	1	ベビーカー	1
英語	12	ご飯	1	ママ	1

弁当	9	イラスト	1	価値	1
トラブル	5	キリスト教	1	会費	1
持ち物	5	クリスマス	1	楽しみ	1
宗教	5	コミュニケーション	1	牛肉	1
文化	5	コンビニ	1	区役所	1
理由	4	ジェスチャー	1	言葉	1
日本人	3	スナック菓子	1	子ども	1
母親	3	ターバン	1	事前	1
忘れ物	3	チャーハン	1	自己	1
家庭	2	トラ	1	自分	
行事	2	ニュアンス	1	辞書	1
同志	2	バラ	1	写真	1
父親	2	ピアス	1	手紙	1
連絡	2	汁物	1	まわり	1

### KWIC コンコーダンス分析

KWIC コンコーダンス分析にて「英語」キーワードに係る記述が以下のように抽出された。(表 7)

表 7 キーワード「英語」にかかる記述

・母親が日本人なので会話など説明は問題ない
・日本語ほとんどわからない
・会話など説明は問題ない
・英語で何とか伝わる
・保育者が英語苦手
・ターバンを巻いてほしいと要望してくる
・日本語がわからないほとんど通じない
・おにぎりだけのお弁当を持ってくる
・ジェスチャーで伝える
・園からのお知らせやお手紙は英語で作成
・英語が話せる他の保護者に通訳してもらう
・母国語がヒンディー語のため
・謝ることができないのでコミュニケーションがとれないトラブル
・保育者が英語できない

・ 区役所に相談しヒンディー語通訳を依頼する
・ 間違っ肉入りのものを給食で食べさせてしまった
・ 読めない書けない
・ 家庭内はメキシコ語
・ 日本人の父親を頼るしかない
・ 子どもの備品も予備しておかなければ
・ 話せる他の保護者に通訳してもらう
・ 辞書を使いイラストを描いて説明
・ 英語のできる職員に通訳してもらう
・ 母国語がヒンディー語のため英語でも太刀打ちできない
・ 仕事でほとんど会えない
・ 英語ですらないために対応できない
・ 日本語少しわかるが、けんかどけがのトラブル時に誤解が生じ更にトラブル

### 考察

自由記述から 22 カ国の様々な国籍の親子が抽出された。多国籍であるが、母国語と英語を使用している親が多く、抽出ご品詞分析で抽出された名詞も「日本語」・「英語」が多かった。さらに KWIC コンコーダンス分析で「英語」をキーワードに係る抽出された記述からも、保育者は多国籍の保護者対応において、言語理解が課題であり、彼らとうまくコミュニケーションが取れない意思疎通の困難感をもっており、故に忘れ物や情報が正確に伝わらないことに不安を抱いている。保育者が母国語を使えない以上、我々日本人が義務教育と養成校で履修した「英語」しか外国語の媒介語はないのである。もっとも保育者の英語力が低いことが困難を助長しているのであるが、おおかた子育ての主である母親の日本語理解が未熟であることより、保育者とコミュニケーションが取れず正確な連絡が届かない。その結果、更に困難感につながっている。連絡が不正確なため、トラブルを引き起こし、事故への不安や不測の事態に対応する二度手間感など保育者がストレスフルな状態であることは想像に難くない。事故や保育の質の低下も懸念されるため、両親のどちらかが日本人・もしくは日本語がわかる親に頼りがちである保育者の姿も見られた。

保育者養成校では日常会話英語ではなく、保育の英語を重点に授業展開されているが、アクティブラーニングを中心としたより実践的な英語コミュニケーション科目が必要であろう。保護者との橋渡し役のひとつとして連絡帳があるが、英語の文章力よりも保育者と保護者の送迎時などの face to face の機会の英語力のレベルアップが求められる。ジェスチャーが一助になる可能性も高い。日本語を英語に、英語を日本語に変換するレベルアップだけではなく、園生活の日常と保育に関することを視覚

でわかりやすい図・絵・写真にするなど、コミュニケーションの役目も担う工夫が求められる。日々子どもたちの姿を保護者に伝えるために、日本の教科目的な英語力ではなく、目の前の今ここにいる外国籍の保護者に対し媒介語である英語を使って拙くても伝える方法が関係構築に有効だと考える。

今後、増加予想される多国籍親子の保育・子育て家庭支援に対する保育者養成校の役割として、科目英語の検討が必要になるであろう。保育所保育指針と幼稚園教育要領が改定された内容の中にも外国につながる子どもたちと保護者支援について、特別な配慮の視点としても盛り込まれている。養成校では特別な教育的ニーズとして、即戦力につながる近い未来の多国籍子育て家庭支援者を育てて、社会に送り出す社会的役割を担っている。

### 今後の課題

現在、日本では多国籍子育て家庭の増加が予測されている。2020年東京オリンピックを機に特に首都圏では保育現場の混雑が想像に難くない。多国籍であり、様々なルーツをもつ外国につながる親子の対応は英語だけにとどまらないかもしれない。異国で育つ子どもたちの最優先が子どもの最善の利益であるが、本研究でも見えたように、子どもは言語の壁を乗り越え適応していく力を備えていると思われる。困難感を抱える保護者と保育者が媒介語の英語でさえ制限されてしまうのであれば、よりトラブル、けが、事故など子どもの安全に関わることも考えられなくはないのである。言い換えれば保育者の英語力がもう少し実践的に上がればトラブルも軽減されるのではないかと考える。子どもの最善の利益を鑑みるからこそ、多国籍の保護者と保育者をつなぐ英語に期待する。

本研究はコミュニケーションツールの媒介語として英語に着目したが、社会のニーズが加速し、養成校では英語を超えた多国籍言語の習得を視野に入れなければならない日もそう遠くはない、と筆者は感じている。

本研究の自由記述の中にも見られた宗教の戒律を重んじるあまりに園生活に馴染めない、母国の行事にあわせて長期帰国してしまうために園の行事や保育者が予定している保育指導案に想定外が起きてしまう、など今後は多国籍親子の日常の生活レベルの常識と日本人（日本でしか生活したことのない）の保育者が違和感をもつ体験もするであろう。その際は多国籍の宗教観をはじめとする多文化共生の視点が求められる。保育者は食事に関すること、子育て観、教育観など様々な多国籍文化や多言語発達、歴史的背景について理解し、保育現場や保護者支援に活かしていく必要がある。

翻訳はいずれデイバイスツールが革新していくであろう。言語を超えた文化を理解するのは日常の常識であるがゆえに、「違い」を恐れずアンチバイアスを心がけることは重要であり心構えのひとつで可能な一歩である。その人の母国（出身地）やアイデンティティーを理解しようと試みるのは外国籍の人に限ったことではない。他者理解の姿勢であるカウンセリングマインドのひとつである。相手を中心に尊重するカウンセリングマインドの姿勢は福祉の対人援助職である保育者の多くはその特性力を持ち合わせている。

保育所において様々な特別なニーズに対して丁寧に対応することこそが、マイノリティと共に暮らす多文化社会での保育のあり方だと考える。

今後、養成校で育む未来の多国籍子育て家庭に対する支援者とは、英語力が高い保育者という側面だけでなく、多文化社会における他者理解に長けたカウンセリングマインドを合わせもつ保育者である。このような時代にあわせた保育者養成が今後の課題であると考えます。

### 引用文献

1) 咲間まり子(編). (2014). *多文化保育・教育論*(p.16). みらい.

### 参考文献

荒牧重人(編). (2017). *外国人の子ども白書*. 明石書店.

庵功 雄.(2016). *やさしい日本語*. 岩波新書.

佐藤郡衛.(2017).国際化の中で問われる日本の学校と学校文化 *児童心理* 2月号(pp.1-10). 金子書房.

清田洋一 (編) . (2017) *英語学習ポートフォリオの理論と実践*. くろしお出版.

韓在熙・咲間まり子.(2017). *多文化保育・教育における保育者・教師の役割や専門性* 2.

—保育者養成における「保育実践力」の育成— *日本保育学会第70回大会発表要旨集 2017*,448.

日本保育協会「保育の国際化に関する調査研究報告書」2000年.

〈[http://www.nippo.or.jp/cyosa/02/02\\_ta.html](http://www.nippo.or.jp/cyosa/02/02_ta.html)〉 2017.10.29 閲覧

文部科学省.(2017). *幼稚園教育要領 平成29年告示*. フレーベル館.

厚生労働省.(2017). *保育所保育指針 平成29年告示*. フレーベル館.

咲間まり子 (編) . (2014). *多文化保育・教育論*. みらい.

山田千明 (編) . (2006). *多文化に生きる子どもたち*. 明石書店.

### 謝辞

調査研究に協力くださいました首都圏及び4県の保育者の皆様、保育現場の実態調査のため、インタビューを受諾して下さった先生方、保育者のみなさんに心より御礼申し上げます。

### 付記

本研究は平成29年度東京都私立学校研究助成「多国籍子育て家庭に対応する保育者養成の課題」による研究を継続し、媒介語としての「英語」に着目してさらに研究を進めたものである。